

古田 弘略 歴

雑誌名	日本文学誌要
巻	14
ページ	20-21
発行年	1966-03-21
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019142

古田 拓 略 歴

明治二九・六・二一 愛媛県周桑郡多賀村（現在、壬生川町）大字北条に生まれる。父古田良平、母同ムメ。「月足らず」のひとり子であった。

明治三五・四 多賀小学校に入学。学齡には達していなかったが、一年早く入れてもらった。はずかしがりやで、一週間母親に学校へ連れていってもらう。

明治三九・四 同小学校高等科に入学（当時、尋常科は四年）。明治四一・四 学制改革により、尋常科は六年となったので、再び高等科一年となる。

明治四三・三 多賀小学校高等科卒業。

〃・六 周桑郡田野小学校の給仕となる。お茶をくんだり、始業終業のラッパを鳴らしたりする。

〃・九 周桑郡多賀村役場の臨時雇となる。戸簿・税務などの手伝いをする。高等科在学中から、このごろにかけて、村の長福寺の河野鉄岫和尚に漢文・英語などを学ぶ。『古文真宝後集』を筆写したりする。

明治四四・四 愛媛県周桑郡立周桑農蚕学校入学。

〃・一二 父良平死亡。

大正元・一二 学校主催の品評会に友人から譲り受けた山東菜を出品したら二等に入選。友人は落選。賞品は友人に渡し、賞状の

み今に残る。このごろから、県の新聞の文芸欄に投書したりする。

大正三・三 周桑農蚕学校卒業。

〃・四 農蚕教師として八月ごろまで新居浜の小野寅吉（のち県会議長）氏宅へ行く。

大正四・四 農蚕教師として八月ごろまで南予の俵津へ行く。

〃・九 母ムメ死亡。ひとりとなる。

〃・一一 周桑郡国安小学校代用教員。このごろから二、三年間、文章世界によく投書する。

大正五・一〇 翌年三月まで、四阪島住友製錬所看量夫となる。深夜ひとり帳面をつけているときなど、涙のとどまらないことがあった。

大正六・五 文学を志し、できるかできないか分からないが、やってみようとして、上京。有楽町に下宿して図書館に通う。

〃・六 上京後、一月足らずで、いとこ渡辺タネが死亡。伯母シゲひとりとなったので、帰郷。以後、伯母をみる。

〃・七 周桑郡多賀小学校代用教員。

〃・一〇 同郡田野小学校代用教員。

大正七・三 再び多賀小学校代用教員。この間、綴り方教育に熱心であった。

大正九・一〇 愛媛県立西条中学校教授嘱託。禎瑞村（現西条市）に住む。このころ詩誌『月光』（生田長江・佐藤春夫を中心とする）の同人となる。

大正一一・一〇 中等教員検定試験「修身科」「漢文科」に合格。

〃・一二 西条中学校教諭。

大正一二・六 越智品吉長女アサエと結婚。

大正一三・七 中等教員検定試験「国語科」に合格。

大正一四・四 愛媛県立宇摩高等女学校（のち川之江高女）教諭。川之江町（現在、市）に移る。

//・五 長男東朗出生。

大正一五・六 高等教員検定試験「哲学概説」に合格。

//・七 長女明子出生。

//・八 県の講習会で垣内松三先生に会う。

昭和二・四 県の国語科視学委員となる。以後十年間ぐらい継続。

//・一一 次男足日出生。

昭和三・一二 郡の講習会で芦田恵之助先生に会い、それまで国文学・哲学と方向は定まらなかったが、国語教育に従事することに決意。

昭和四・二 伯母渡辺シゲ死亡。

//・三 郡の講習会で芦田とともに講師として一週間郡内を廻ったが、この間起居とともにし、教えられることが多かった。

//・七 三男昴三出生。

昭和五・六 出張上京のとき、前年出版の『国語国文の教育』の著者、西尾実氏を訪い、七時間ほど話し合う。西尾氏との交わり、このときから始まる。

//・一〇 四男普行出生。

昭和八・三 五男無出生。このごろから二、三年間、芦田先生はサクラ読本の教授指導書執筆のため、川之江に毎年一月ぐらい滞在される。

昭和一二・三 愛媛県師範学校教諭兼附属小学校主事。道後湯之町祝谷に住む。

昭和二三・一一 愛媛県立川之江高等女学校長。また川之江に帰る。

昭和一一・八 六男周六出生。

昭和一一・四 県の社会教育講師となる。翌年まで継続。

//・一一 七男篤出生。二週間余りで死亡。

昭和一一・九 北京師範大学教授。家族は郷里に残し、単身赴任（のち長女明子を伴う）。北京では山口喜一郎先生から日本語教授法の理論について教えられることがあった。

昭和一一・九 高級中学日本語教科書編集主任。二〇年五月までかかって編了。

昭和二〇・七 北京師範大学退職。便を待つうち、八月に敗戦。

一二月末に引き揚げとなり、愛媛県周桑郡壬生川町へ帰る。

昭和二一・二 周桑郡小松町、私立子安中学校教諭。

昭和二二・四 子安中学校長。

昭和二三・三 子安中学校を県立に移管して退職。以後、一年間ぐらい読書したり、県内を講演して廻ったりする。

昭和二四・一〇 上京。川之江、北京時代の友人、篠原利逸氏宅に世話になる。

昭和二五・二 中野区鷺の宮に移る。以後四、五年の間に、順次家族を呼びよせる。

//・四 法政大学教授。以後、各国語教育団体に関係することが多くなった。

昭和三八・五 武蔵野市関前に移る。

昭和三八・一 埼玉県北足立郡新座町に移る。

昭和四〇・三 法政大学退職。四月から同大学講師。